

# 教育実習を通じた学生の「教える経験」の構造変容と 実習支援の方策についての研究

◎松川 誠一（東京学芸大学人文社会科学系社会科学講座）

○林 正太（東京学芸大学先端教育人材育成推進機構）

細井 宏一（東京学芸大学附属大泉小学校）

後藤 道洋（東京学芸大学附属大泉小学校）

山田 剛史（東京学芸大学附属竹早小学校）

代表者連絡先：seiichim@u-gakugei.ac.jp

【キーワード】教育実習、教育実習生、教える経験、質的研究、深層インタビュー

## 1 はじめに

教育実習は教員養成カリキュラムにおいて重要な役割を果たしているが、その実施内容について教育実習をめぐる教育実習生の経験を分析対象とした研究は多くはない。また、実習生の意識に焦点を当てた研究であっても、その多くはアンケート調査から得られたデータに基づいた量的アプローチによる研究となっている。そのため、学生の資質・能力が教育実習を経ることでどのように変化しているのかという点については不明な部分が多い。そこで本研究では、教育実習を学生の「生きられた経験」と捉え、教育実習を通じた「教えるという経験」の意味内容の変容過程を深層インタビューによって得られる質的データに基づいて明らかにした。さらにその結果を踏まえて、教育実習を行う学生に対する大学・附属校による支援方策について検討した。

## 2 本プロジェクトの概要

### 2.1 調査方法

#### 2.1.1 調査対象者

中心的な調査対象者として東京学芸大学・初等教育教員養成課程（以下、A 類と略、現在は学校教育課程初等教育コース）に在籍し、3 年次に附属小学校で、4 年次に東京都の公立小学校で教育実習を経験した学生を設定した。対象学生のカリキュラムにおいては 3 年次の教育実習（以下、基礎実習）は卒業要件の必修科目であるが、4 年次の公立校における教育実習（以下、応用実習）は選択科目となっている。本研究の調査期間において応用実習の履修率は A 類学生の 30% 強である。こうした背景を勘案すると本研究の調査対象者の母集団として想定される層は、教職志向が強く教育実習の意義を高く評価している学生からなっていると思われる。また、調査に協力してもらえる学生をボランティア・ベースで募る際に、調査者が同僚大学教員に対して学生を推挙してもらうという手続きを踏んだために、上記の傾向を特に強く持つ学生が結果として選ばれている可能性は高い。実際、インタビューを行った A 類学生は 1 名を除く全員がインタビュー時点で公立小学校への就職を決めており、その 1 名も教職大学院への進学を予定していたことを踏まえると、これらの学生は教職キャリアを強く意識して教育実習に臨んだ者であると言えるであろう。

以上のような A 類学生が持つ特性をより明確に把握するために、東京学芸大学中等教育教員養成課程（以下、B 類）の 4 年生で、副免許として初等教育教員免許（以下、小免）を取得するために 3 年次 2 月に附属小学校で教育実習を履修した学生や、教員養成カリキュラムの制度的内容が異なる国立教員養成系大学 2 大学の学生に対してもインタビュー調査を実施した。ま

た、それら2大学を含む3大学で教育実習の実務を担当している大学教員とその附属校で実習指導を行っている教員1名にもインタビューを実施した。さらに、2024年度に東京学芸大学4年生の応用実習を引き受けた東京都区部の公立小学校において教育実習生の指導教諭となった公立小学校教員2名に対しても、教育実習終了直後の夏休み期間中にインタビューを実施した。

調査対象となる学生の選抜は、調査趣旨を説明したうえで調査者の同僚教員に条件を満たす学生の推薦を依頼し、推薦された学生に対して改めて調査者から電子メールで調査趣旨を説明し調査協力を依頼し同意を得るという手続きを踏んだ。A類は専攻分野（教科）等による多様性が見られるため、推薦を依頼した教員の所属先（教室）も多様なものになるように意図的に選択した。その結果、A類全15教室のうち9教室の学生が調査対象に含まれることになった。

インタビューは2023年7月から2024年12月にかけて断続的に行った。そのため調査対象者となった学生は2020年度入学者と2021年度入学者に分かれている。A類学生については、延べ18回のインタビューを実施したが、複数回のインタビューを行った者が2名おり、調査対象者は16名である。B類学生については、3名の学生に対して延べ5回のインタビューを行っている。

調査対象者の性別については同僚教員への推薦を依頼する際に選抜条件としていないが、A類学生については女性10名（62.5%）、男性6名（37.5%）であり、結果としてA類学生全体の性比に近いもの（2024年度入学者では女性56.3%）になっている。

### 2.1.2 調査方法

学生対象者については、1人ずつ個別に半構造化深層インタビューを実施した。インタビューは同意を得た上でICレコーダーに録音した。録音データからトランスクリプトを作成し、分析の元データとした。インタビューの多くは松川と林の2人が同席して実施している（3件は松川のみ、1件は林のみで実施している）。学生に対するインタビュー時間は1回につき60～90分となっている。

インタビューは、調査対象者が教育実習で経験したことについて、実習当時に考えたり感じていたことだけでなく調査時点での振り返りも含めて、ほぼ出来事の時系列順に自由に語ってもらった。語られた出来事としては、基礎実習直前の状況、基礎実習のオリエンテーション時の出来事、基礎実習中の出来事、基礎実習後の大学での授業のこと、応用実習中の出来事といったものがある。

教員対象者の場合は、教育実習の運用体制に関わること、教育実習を指導してきた中での経験や教育実習のあり方について考えていることを中心に自由に話してもらった。

## 2.2. 調査結果

### 2.2.1 教育実習前の状況

大学生になってから小学生と接触した経験を持っているかどうかは、教育実習時の子ども理解に対して大きな影響を与えているが、実際には、実習前に小学生ぐらいの子どもと接触した経験をまったく持たない学生は多い。つまり大多数の学生は、小学生の現実的な姿を知らないまま基礎実習を迎えている。塾などのアルバイトで小学生と接触する機会がある者もいるが、いわゆる個別指導塾であっても塾内での子どもとの接触は授業時間だけで会話の内容も学習指導に限定されたものとなっている。そのため、塾講師の経験は教育実習で教えることとは質的に異なるものと捉える学生は多い。

教育実習に臨む学生は、教育実習に対して強い期待感と強い不安感の両方を抱いている。その傾向は、3年生になって事前事後の授業が始まり配属校が決まると特に強まってくる。まず、大多数の学生は教師として教室で大勢の子どもたちを前にして立つという状況そのものに対して強い不安感を持っている。この不安感は大学で模擬授業を行っていても解消されることはない。その一方で、子どもたちと濃密に接する機会を持つこと自体に対する期待感も強い。

子どもたちと「仲良くなる」ことを教育実習での第 1 目標としていた学生がほとんどである。それは、子どもたちと良好な関係性が築けていることが教室での学習活動の前提条件であると理解しているためであると思われる。

大学の授業では、教育実習で必要となる知識・技能を習得することが目的となっている授業も少なくない。学習指導案の作成や、作成した指導案に基づいて模擬授業を行う経験は全員が持っている。しかし、そうした授業においては、どのような子どもに対して授業を行うことを想定するのかという点で問題が生じている。学生は子どもとの接触経験が少ないために、授業内での子どものあり様を想像しそれを組み込んで指導案を作成することに大きな困難を感じている。こうした事態は指導案を作成する授業を担当している大学教員も把握しているが、対処のしようがないため、「児童観」の欄などは実質的に無視して指導案を作成するように指示している。学生にとっては子どもの姿を想像することさえ難しいため、指導書の中で記述されていたり他の授業で扱われた平均的、抽象的な子ども像に関する情報をそのまま利用して「児童観」等の子どもに直接関係する欄を機械的に埋めていくということになる。

このように実習前は予想される子どもの反応が授業計画・指導案において実質的に無意味なものになっているために、勢い学生は指導内容とその教授方法に注意を集中させることになる。説明している間の子どもの振る舞いを想像できていないため、大学生が当該指導内容を理解しているレベルを半ば無意識に前提として、授業における説明の仕方を組み立てている。

## 2.2.2 教育実習を通した意識の変容

教育実習の最初の週は、通常、指導教諭等が行う授業を観察する期間として設定されている。これが授業観察の初めての経験ではないにしても、特定の学級の様子をある程度まとまった時間で観察することは、ほぼ全員が初めての経験となる。

指導教諭による授業において教師と子どもたちの授業内でのやりとりがスムーズであり、実習生が行う授業におけるそれとは質的に異なることを学生たちは感じ取っている。教員の授業技術の水準が高いことがその違いを生み出している訳ではないとも感じている。その原因を特定し言語化することはできないのであるが、学生が感じ取っているものは教師と子どもたちとのやりとりが生み出している一体感のようなもののように思われる。たとえば、教師の問いかけに対する子どもの反応が、教師によって予期されていたものでなかったとしてもコミュニケーションとしては「なめらかに」進んでいくような状態である。授業内でのそうした相互作用の進行を教師も子どもたちも当然視していてコミュニケーションに没入している状態を成り立たせている条件について、学生は意識せざるを得ない。

教育実習を行うことを通してのみ身に付けることができるようになる知識・技能として、教えるという振る舞いに付随する身体化された知識・技能がある。身体化された知識・技能は概括的に抽象化された原則論として言語化され大学の授業内で伝達されているが、学生が実際の授業の中でその知識を利用することができるようになるかといえば、そのようなことはない。それらが必要とされる状況に身を置いて試行錯誤を繰り返すことを通してしか、そうした身体化された知識・技能は獲得できない。机間指導に関わる知識・技能はそうした身体知の代表例である。

たとえば机間指導を通して子どもたちの考えの多様性に直面したときに、一斉指導の補完として机間指導を考えることの現実的な制約に直面する。そうした中で机間指導を教師だけが行うのではなく、理解が進んでいる子どもにそうでない子どもを手伝ってもらう時間としても存在しえることに気がつく学生もいる。その気づきは、授業の実践主体が教師に限られたものではなく、授業実践が子どもとの協働実践としても存在するという教育実践の意味構造の質的な転換が起こっていることを示唆している。

実習開始前に学生たちが抱いている授業のイメージは、教える側が持っている知識を正確かつ効率的に教わる側に伝えるというものであった。子ども中心の授業づくりという概念は大学の講義のなかで学生たちに伝えられてはいるが、それは子どもたちの理解が容易になるような

授業の工夫の重視といったようなイメージで受け止められていたようである。

実習が始まると、実習前に考えていた抽象的な子ども像がいかにも単純で平板なものであったか気づく。子どもの多様性を前提として作成したはずの指導案に基づいて授業実践を自分たちで始めるようになると、子どもたちの反応が指導案作成時に想定していたものをはるかに上回る多様性を持って自分たちに返ってくるという経験をするようになる。

基礎実習において自分たちが作成した授業計画や授業実践に対する自己評価は、多くの場合、「失敗」という低いものである。しかし、失敗した理由が自分たちの子ども理解の浅さにあるということは明確に認識されている。子ども中心の授業づくりということが、教師の投げかけに対する子どもの反応という相互作用を基盤としていることに気がつくのである。そこでは、たとえば、机間指導が遅れを取り戻すための個別的な支援のためだけに行われているのではなく、机間指導を通じて子どもたちの多様な考えを把握し、それらを授業展開のための重要な資源として利用していくことを学んでいく。それは授業づくりに関する基本的な考え方の転換であるとともに、転換された考え方を授業内で実現するための身体化された知識・技能を身に付けることでもある。〈教える〉という経験の意味連関において教師と子どもそれぞれの位置付けが教育実習を通して大きく変化していつている。経験学習としての教育実習の最も大きな効果は、この〈教える〉ということに対する意味づけの構造変容にある。

### 3 今後の課題

本研究はA類学生の経験に焦点を当てており、教師が担任学級において多くの時間を過ごすという小学校に特徴的な教育環境を前提とした研究となっている。教科担任制をとる中等教育においては、今回の調査結果とは異なることが教育実習においても起こっていることが考えられ、インタビューにおいてもそれを示唆する語りは存在していた。今後、小学校においても教科担任制の導入が進められることが予想されるが、その際に教育実習がどのような影響を受けるのかは注視していく必要がある。また、現時点においても附属小学校の中でも教科担任制に近い教育体制がとられている学校があり、そこでは教育実習の実施体制を変更する必要があるが、十分な検討が行われているようには思われない。

教科担任制が取られている中等教育の教育実習については、別途、検討が必要である。子どもとの接触が質量ともに限られるなかで、子ども理解を起点とする教育がどのように行われ、それを教育実習を通して学生が学んでいくことができるのかという点は、小学校との比較も含め、重要な研究課題となろう。

二つ目は、教職課程における授業観察の重要性に関わる問題である。本学に固有の問題として、教育実習に至るまでの時期における授業観察の機会が質量ともに圧倒的に不足している。本研究において調査を行った他大学はいずれも相当量の資源を割いて授業観察の機会を拡充していた。また、時数の確保だけでなく授業観察の方法についても学生に指導する方法を検討し、具体的な方策を整備することが必要であろう。これは大学での授業だけでなく、教育実習中に行われる授業観察についても同様である。大学での授業と連携する形で附属校における実習中の授業観察に関わる指導計画を開発する必要がある。

#### 【付記】

本研究において実施された学生へのインタビューについては、その主なものの逐語録を松川誠一・林正太編（2025）『令和6年度特別開発研究プロジェクト 教育実習を通じた学生の「教える経験」の構造変容と実習支援の方策に関する研究 学生へのインタビュー集（第一集）』および『同（第二集）』に採録している。